

編集後記

先日、フランスのブルターニュ地方の大学に客員教授として三週間ほど滞在する機会を得て、授業、セミナーの他、共同研究（実験）を進めることができた。招いてくれた教授（WPさん）はドイツ人であるが、イタリア人研究者と結婚し、現在フランスに住んでいるので英語とあわせ四カ国語に堪能である。毎晩のように家に食事に招かれたのであるが、両親は子供たち（4歳と7歳）にはそれぞれの母国語を用いるので、私に対する英語と合わせて様々な言語が飛び交い非常に面白かった。WPさんは、以前から「フランス人は、学生であっても教官であっても、英語を喋ろうとしない、海外どころかブルターニュ地方からも出ようとしな」と嘆いていたが、私は彼の能力と家庭環境が特殊なだけでフランス人もドイツ人もイタリア人も英語に違いはないと思っていた。実際、その大学から京都にきたインターンシップのフランス人学生は、英語のコミュニケーションには全く問題がなく、フレンドリーであった。

しかし、今回の滞在の体験からその考えは一変した。(1) 何人かが集まるとき（例えば議論やお茶タイムなど）、外国人がいても会話はずっとフランス語である。これが、ドイツならばたとえ外国人が話題に入っていないなくても英語で会話はなされることが多い。何を喋っているかもわからないまま立ち続けるのは苦痛であった。(2) セミナーのときの質問が、WPさん以外は皆無であり静かに講演を終えた。これまで海外で講演すると日本でするよりも圧倒的に多くの質問があったので、この反応は意外であった。(3) 会話や文章で、「英語は下手ですが、」という接頭語がつくことが多い。これらの体験は、恐らく日本にくる外国人が少なからず体験するであろうことと全く同じではないか。日本人の場合、概して英語が苦手であること、非社会的であること、さらに失敗することを躊躇する気質と関連しているだろう。一方のフランス人は、英語が苦手な上に、他人のことは気にしない超個人主義からきているようだ。私の知り合いによれば、(1)の現象は、ドイツ人はウェットでフランス人はドライであることから説明できるという。

上の解釈は、私のごく限られた経験からきているものであり本当かどうかは定かではないが、フランス（外国）にいくならばフランス語（その国の言葉）をカタコトでもよいから使うべきであると感じた。今回は意味も解らないまま「ウララ～」を連発して三週間を乗り切ったが、それ以上は無理であろう。そういえば日本では「シンジラレナイ」を連発する監督が愛されている。英語「だけ」喋れば世界の人とコミュニケーションできるという考えは、たとえそれを英語を母国語としない人がもったとしても実は傲慢であると思うようになった。

（直交ダイマー）